EDO-TOKYO MUSEUM 江戸東京博物館

ホームページ〈えど友Web〉
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

No. 19
平成16年
2004
5-6

江戸東京博物館友の会会報

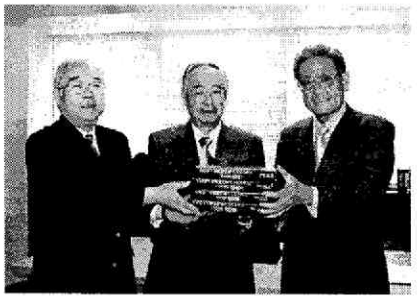
開館10周年を祝い
友の会から記念品を贈る
～研究資料に、大宅文庫CD-ROM～

江戸東京博物館の開館10周年を祝して、友の会から博物館に記念品を贈ることになり、その贈呈式が3月29日(月)博物館応接室で行われました。

友の会山本市郎会長から「10周年をお祝いして何かお役に立つことはできないかと検討した結果、記念品をお贈りすることになりましたのでお収めください」とあいさつがあり、記念品の内容について佐山彪副会長から説明があって、記念品が竹内誠館長に手渡されました。

これを受けて館長から「こんな厳しい時勢に助かります。本当にいいものをいただきました。学芸員の研究に活用させていただきます」とのお礼の言葉があり、贈呈式を終わりました。

贈呈した記念品は紀伊國屋書店制作のCD-ROM『大宅壮一文庫創刊号コレクションシリーズ』で、「明治編」「大正編(一)」「大正編(二)」「大正編(三)」の全4巻(定価約33万円)です。対象となる雑誌は全部で600余を所収、その各創刊号の表紙から裏表紙まで広告を含むすべてのページが画像で閲覧できます。



記念品贈呈式 (右から)竹内館長、山本友の会会長、佐山同副会長＝江戸博応接室で

今後は職員図書室に置かれ、研究資料の検索などに利用していただくことになります。

【取材】文:広報部会・松原良、写真:同・佐藤幸彦

会員継続更新のお知らせ

●手続きはお早めに！

友の会は会員の皆さんで支えられています。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「継続手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

＊更新しませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

ハ・イ・ラ・イ・ト

- 2004年度のはじまりです。創立から4年目になりました。新年度も活動に積極的なご協力をお願いします。
- 第4回友の会定期総会は5月28日開催です。(2ページ参照)
- 文京ふるさと歴史館を訪問、交流
- セミナーなどの活動報告
  - ・2/7ほか 創作講座「江戸切子」
  - ・2/18 見学会「常設展を見る」
  - ・3/6 セミナー「読み解き忠臣蔵」
  - ・3/14 創作講座「手描友禅」
  - ・3/27 見学会 特別企画バスツアー「家康の駿府城とその周辺」
  - ・4/3 特別観覧会「新選組展」
- えど友プラザ 会員投稿のページ
- 〈江戸博クリップ〉 学芸員エッセー
- [シリーズ] ミュージアムショップ名店めぐり〈11〉「松本彫刻店」
- 役員会・各部会「会議日誌」
- 《事業部会だより》
  - ・セミナー、新古文書講座開講！
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽にお寄せください。

第4回・平成16年度 定期総会に出席しよう!

～5月28日(金) 午後1時30分から、1階会議室で開催～

4年目を迎えた江戸東京博物館友の会は、会員数も1,000名に迫る勢いで活動も多岐にわたり、このところ各催しへの参加者も増えてきております。

第4年度となる平成16年度も一層の活動の充実、会員の皆さんのより積極的な参加が待たれていますが、その第一歩となる定期総会が以下のとおり開催されます。

総会では昨年度1年間の活動を締めくくると同時に今年度の事業計画・予算を会員の総意としてまとめます。

別送(5/7発送予定)の議案書をお読みいただき、ぜひご出席ください。

●

■平成16年度 友の会総会

日時:5月28日(金)午後1時半

場所:江戸東京博物館1階会議室

■主な議題 (予定)

・平成15年度事業報告
・平成15年度会計報告
・平成15年度監査報告
・平成16年度事業計画案
　事業部会・広報部会・総務部会
・平成16年度事業予算案
・規約改正案

■竹内館長記念講演と懇親会

毎年、会員の皆さんに大好評の竹内誠・江戸東京博物館館長の記念講演が、今年も総会に引き続き午後3時から予定されています。

そのあと午後5時から、館内のレストランで懇親会が開催されます。

「文京ふるさと歴史館友の会」を訪問

全国から依頼がくる「文京まち案内」活動

昨年5月、他の「友の会」組織との交流の輪を少しでも広げ、当友の会の活性化を図るため、都内36の公立歴史系博物館等にアンケートをお願いしました。その結果、6館で友の会を有することがわかりました(『えど友』第14号参照)。そのうち足立区立郷土博物館と文京ふるさと歴史館の2館友の会とは会報の相互交換を行っています。

さらに栃木県立博物館友の会から会報合本、豊島区立郷土資料館友の会から画文集「昭和　思い出の日々」、研究報告や資料をまとめた冊子「旧谷端川の橋の跡を探る」の寄贈を受けました。

こうした交流をさらに進めるため、そのうちの一つ「文京ふるさと歴史館友の会」を去る3月17日に訪問し、懇談しました。出席者は同友の会側(写真左)からは副会長の石橋秀雄さん、広報部の鈴木和枝さんと中上裕子さん、当友の会からは副会長・大松騏一、広報部会長・松原良、同副部会長・菅沼和男の6人です。

同友の会は平成3年にスタートし、現在の会員は約340名で、会計部、総務部、事業部、広報部、研究部、まち案内担当で構成されています。会員あてに機関誌『友の会だより』を年3回、増刊号『花時計』を年1回発行しています。このほか、研究部・地域調査班の研究成果として『文京の碑』、『文京の歳時記』を出版し、近々『文京の民話』を上梓(じょうし)の予定とのことです。

いくつかの活動のうちで最も興味を引かれたのは「文京まち案内」です。これは文京区のみならず、要望があれば上野、浅草、ときには原宿までもガイドするというものです。ボランティアガイドの依頼は浜松、磐田、大館といったところからもあるそうで、全国的な広がりを見せています。平成15年には23件の依頼があり、延べ711人(成人566人、学生145人)を案内されました。

「文京まち案内」を担当する30人ほどのメンバーは、満足いただくガイドをするため自主学習会を隔月に開き、知識の研鑽(けんさん)を積んでいるとのことです。資料の作成にかなりの時間を割かれるとの苦労話も披露されましたが、その一方で軌道に乗った活動に自信さえ、うかがえました。

文京ふるさと歴史館友の会の場合、事業運営に直接携わる会員数は私達の友の会のそれを上回っているなど、見習う点の多い今回の訪問でした。

【報告】文:広報部会・菅沼和男、写真は文京ふるさと歴史館友の会提供

■文京ふるさと歴史館■

文京区営施設、平成3年(1991)4月開館。2階建ての常設展示室には武家と町人の暮らし、鴎外、一葉など著名文人の事績が展示されている。
〒113-0033東京都文京区本郷4-9-29 TEL.03-3818-7221、丸ノ内線・大江戸線本郷三丁目駅、または三田線・大江戸線春日駅から徒歩5分

［新年度ごあいさつ］

江戸開府四百元年

江戸東京博物館館長　竹内　誠

昨年は江戸開府400年と、開館10周年の記念事業が重なり、大変活気のある年でした。おかげさまでご来館者は、本館・分館あわせて200万人をはるかに超える盛況でした。

徳川家康が江戸に幕府を開いたのは1603年ですが、ローマは1日にして成らず。江戸もまた、翌1604年からの営々とした努力の積み重ねがあってこそ成ったのです。

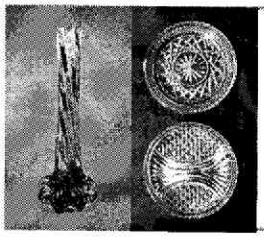
今年2004年は、その江戸の平和と繁栄を築く第一歩を踏み出した1604年にちなみ、「江戸開府四百元年」と銘打ち、当館のさらなる飛躍をめざします。

そのため、たえざるリニューアルの常設展示、魅力あふれる企画展示、情報公開のためのIT化をはじめ、ミュージアムショップやレストランのいっそうの充実をはかります。とくに今年度は、地元両国の町活性化事業への参加や、高齢者げんきプロジェクトの実施など、地域との連携をさらに密にし、また新しい教育プログラムの開発にも力を入れます。当館主催の国際博物館シンポジウムも2回にわたり開催します。

開府400年を画期として、新たな気持ちで踏み出したい。地域に、学校に、そして世界に、大きく貢献する博物館でありたい。その基礎を築く「事始め」の元年という心意気で、新年度を迎えております。

「江戸開府四百元年」。今年度の江戸東京博物館の大きなテーマです。よろしくご支援のほど、お願い申しあげます。

◇『江戸博NEWS』Vol.45、2004/3/31から



江戸東京博物館友の会 創作講座（2004/2/7・22・29）

ガラス製造見学から切子カットまで「江戸切子」

協力：三洋硝子さん　講師：須田秀石さん（秀石工房）

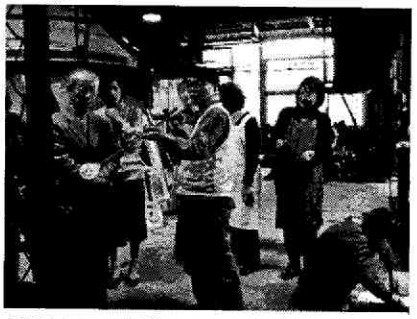
今回はガラス製造の見学から始まって江戸切子のカット体験まで2部構成の講座でした。

［1］硝子の製造工程実演見学と体験

2月7日（土）三洋硝子さんのご協力を得て「江戸切子」創作講座の第1部が行われました。今回見学と体験をお願いした三洋硝子さんは、伝統的な江戸宙吹き硝子の手法により皇居の照明用硝子（グローブ）やガラス食器を製造しており、昨年のNHKテレビ「川、いつか海へ」に登場した浮き玉は三洋硝子さんほか2社の協力でロケが行われたそうです。

三洋硝子さんに着いた受講者一同は、まず宙吹きガラス職人の浅井さんの実演を見学しました。そして各人による体験を行いました。製作するのは一輪挿しで、9色の色ガラスの中から思い思いに色を選択し、さあ体験開始です。

工程は――①吹き竿に溶けた透明ガラスをまきとる、②チップ状の色ガラスをガラス玉にまきとる、③炉の熱で透明ガラスと色ガラスを溶かしなじませる、④鉄リンで転がしガラス玉の形を整える（とここまでは職人さんがやってくれて）、⑤ガラスがやわらかいうちに息を吹き込み、ガラス玉を大きくする（やっと受講者登場）、⑥ガラス玉の外側のさらに透明のガラスをまきつけ大きなガラス玉にする、⑦鉄リンで形を整える（この二つも職人さん）、⑧モール（型）にはめこみ息を吹き込む（ここ、受講者）、⑨炉の熱でガラスを温めやわらかくする（また職人さん）、⑩ゆっくり竿を引き上げ一輪挿しを伸ばしていく（受講者）、⑪板で底部を平らにする（スタッフの青年）、⑫中がベルトコンベアのトンネル式徐冷炉に入れ、500℃から40℃ぐらいまで徐々に冷やす、（ここからは受講者が帰ったあと）⑬加工専門の職人さんが熱で温めながら吹き竿からはずしたあとをカットする、⑭5種類のガラス専用大型やすりで段々と目を細かくしながら、口部と底部を磨いていき完成――、というものですが、職人さんの助けを借りながらところどころを体験させていただき、自分なりの「一輪挿し」ができたことは大きな喜びでした。



「私たちにできるかしら…」
吹きガラス職人浅井さんの説明を聞く皆さん

[2] 江戸切子加工工程の見学とカット体験

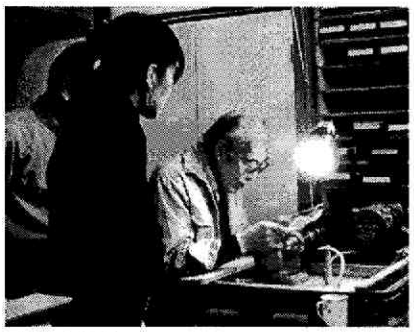
2月22日(日)と29日(日)の2日にわたって「江戸切子」創作講座第2部が行われ、「須田秀石工房」で江戸切子の解説と実演見学(見学コース)に加え、カット体験(体験コース)をすることができました。

見学コースは、まず「江戸切子についての解説」で、江戸時代と明治以降の江戸切子の歴史と須田秀石さん自身の歴史を話していただきました。堀口市雄(初代秀石)に12歳で弟子入りし、戦後江戸切子高級カットグラスメーカー・堀口硝子の立ち上げに師とともに奔走したしたことなどを熱く語っていただきました。

続いて「切子職人技の解説」で、堀口硝子定年退職後「秀石工房」を創設し、江戸切子新作展で江東区長賞を受賞する一方、90名にものぼる生徒さんを指導される切子職人・切子創作作家としてのこだわりをお話いただきました。第一は道具へのこだわりで、独自のデザインを編み出すために様々な道具を発注されるそうです。第二は素材へのこだわりで、カットするクリスタルの素材そのもの(本生地)とその光の屈折による輝きへの熱い思いです。そして第三は一番悩まされるというデザインへのこだわりです。代表的な江戸切子模様を組み合わせながら、ヨーロッパの流れるような曲線を組み合わせたりして素晴らしいデザインを編み出していきます。

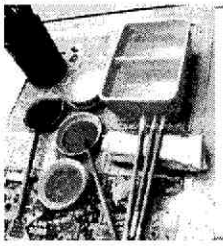
見学コースの最後は「工程の解説と実演」です。割り出し、すじ彫り、荒削り、ダイヤ磨き、酸磨きといった工程を解説していただき、実際にガラスの面をグラインダーで削って幾何学模様をカットする実演を見せていただきました。

そして体験コースですが、あらかじめ基本的な割付を事前に準備していただき、受講者は2パターンのデザインから自分の好きな方を選択しました。次いで受講者の前で職人さんが模範カットを行い、カットの基本を教えていただきました。


実演する秀石さん

そしていよいよ受講者によるカットへの挑戦です。初めてなので、恐る恐るのカットです。悩むとだんだん深いカットになって、修復不可能区域へ入ってしまいそうです。でも大丈夫、本物の仕上げは江東区無形文化財・須田秀石の技でやってくれます。それなら「安心、安心!!」と進行していきました。そして光り輝く「江戸切子」を手にすることができたのです。

【報告】文・写真:事業部会・黒瀬雅博



江戸東京博物館友の会 創作講座(2004/3/14)

伝統友禅の世界「手描友禅」

丁寧な指導で、満足のいく作品に

講師:田中光江さん、特別講師:佐藤平八さん(友禅作家)

「手描友禅」の創作講座が3月14日(日)に江戸東京博物館学習室で開催されました。江戸中期に宮崎友禅斎によってその一様式が完成されたといわれる友禅染。そこに江戸の粋が加わって発展したものが江戸友禅ですが、いまは手描きによる後継者も減ってきていて型紙を使用する型友禅によって量産されています。

本講座ではそんな数少ない友禅作家のお一人で、鎌倉に工房をかまえる佐藤平八先生と門下生の方々に手描友禅の指導をしていただきました。

実際にはひとつの作品を仕上げるのに何段階もの工程を経るわけですが、今回の講座ではそのなかで、下絵に彩色する作業(「色をさす」と言う)を体験しました。平八工房内弟子の田中光江さんご指導のもと、布地に描かれている下絵に色をさしていきました。

まったくの初心者でもわかりやすく丁寧に説明していただけたので、試作用の紙で練習してからゆっくりと丁寧に色をさしていくと、初めてでも満足のいく作品に仕上げることができました。

色をさす前のスカーフを手にして説明する田中講師

参加者には、日ごろから友禅染に親しんでいる人もいれば、まったく初めてという人もいて、「実際に体験してみて友禅の細密さに驚いた」「色を掛け合わせると無限に色彩が生まれて楽しい」という声も聞かれました。

体験のほかにも工房の方々が半襟に色をさしているところなどが見学できて、熱心に質問する参加者がみられました。会場には佐藤先生と門下生の方々の作品や、友禅染に使用する道具の展示もされていて、展示物と友禅の歴史などについて解説していただきました。

【取材】文・写真:広報部会・斉藤美香子

第7回江戸東京博物館友の会 見学会(2004/2/18)

常設展をじっくりと見る

ボランティアガイドの解説で観覧

友の会会員の「キホンノキ」である「常設展をガイドつきでじっくり、きちんと見よう」という趣旨の見学会が2月18日(水)午後1時から開催されました。当日の参加者は47名、5班に分かれ各班に1名のボランティアガイドの方に付いていただき各展示コーナーを見学いたしました。

普段なかなかガイドの方にお願いして展示コーナーをまわることのない中、ガイドの方の丁寧な、そして展示解説板では知りえないエピソードなどの説明があり、各班それぞれに有意義な見学会になりました。

「江戸城本丸大広間・松の廊下・城書院」の復元ミニチュアのコーナーでは「大広間で将軍拝謁のとき諸大名は将軍の顔を見ることは出来なかった。なぜ出来なかったかと言うと"大広間の襖は閉まっており、将軍が座して襖が開くときは大老が声を掛け諸大名は一斉に平伏し、襖が閉まるまで平伏状態"であったから」とのこと。これは幕府の危機管理の形態でもあったとの説明にはなるほどでした。暴れん坊将軍のように"余の顔を見忘れたか"とはいかなかったようです。能楽堂前の地面は芝生で出来ており、江戸市民が座って能を観賞したとの説明に驚いたりでした。

当日参加の方から寄せられた声(感想アンケートから)は「大変楽しく見学させていただきました。何度か訪れてはいるのですが、やはりガイドさんに説明してもらいながら見学するのが正しいようです。次回からそのようにしたいと思います」(橋本翔二さん)、「説明が詳しくよく分かった」(野添コトエさん)、「楽しく江戸の生活ぶり・文化を学ぶチャンスをいただき、あらためて江戸への思いを長屋の暮らしの中に見つけられたと思っています」(ツキジチエコさん)、「まだまだ興味つきないものばかり、お話も素晴らしく聞きやすかったと思います」(長田恵子さん)などで、福岡信枝さんなど数名の方からは再度の企画を望む声も寄せられました。

ただ、「とても分かりやすく面白かったが、班の人数がもう少し少なく、解説の方の声がもう少しよく聞こえるとよかったと思います」(矢島フミコさん)や「イヤホンの利用を考えてはどうか」(70歳代・男性)といったご意見もあり、今後の参考にしてほしいところです。

この日ガイドをしてくださったのは、岩松精、柏木静、高橋隆、玉木達二、槙野和子のみなさんでした。どうもありがとうございました。

なお、常設展は個人でも常時ガイドを受けられますのでご利用されるとよいと思います。

【取材】文・写真:広報部会・瀧口逸策

江戸東京博物館友の会 特別観覧会(2004/4/3)

NHK大河ドラマ「新選組!」展

池田屋事件検証再現模型も展示

企画展「新選組!展」(会期:4/3-5/23)の友の会向け観覧会が4月3日(土)午後5時30分から開催されました。

新選組の前身、壬生浪士組は文久3年(1863)、江戸幕府により京都守護の目的で近藤勇や土方歳三など、武芸に秀でた浪士を集め編成された幕末史に名を残す部隊ですが、彼らの人気は21世紀の今日もなお色あせることはありません。

1月から始まったNHK大河ドラマの影響もあってか、当日も新選組ファンの会員が多数集まり、1階会議室がいっぱいになるほどの賑わいで、はじめに学芸員・市川寛明さんによる展示の見どころ解説が行われました。

今回の展覧会では新選組ゆかりの各地、京都や東京・多摩地区から、残された彼らの遺品や歴史資料などが展示されています。

会場に入るとまず力強い「尊攘」の二大文字が来場者を迎えてくれます。

展示の見どころの一つである"池田屋事件検証再現模型"は配布された解説プリント(場内で入手可)と照らし合わせてみると、明治維新に影響をあたえたという新選組のハイライトである池田屋事件の全容を垣間見ることができました。

近藤勇着用の稽古着や芹沢鴨デザインの新選組袖章など、隊員自身の遺品もさることながら、"近藤勇のさらし首を伝える瓦版"など当時の新選組をとりまく歴史資料も充実しており、彼らの生きた幕末という激動の時代そのものの姿が見えてくるように思えました。

【取材】文・写真:広報部会・斉藤美香子

第16回江戸東京博物館友の会セミナー(2004/3/6)

古文書で読み解く忠臣蔵

講師 佐藤 孔亮さん(古典芸能ライター)

討ち入られた吉良方の調書?

私は歴史学者でも研究者でもありませんが、ここ数年、忠臣蔵事件の資料を読んでみると歌舞伎や映画の物語を裏づけるもの、あるいは違ったものとも出会うことができ大変興味をひかれています。きっかけは、赤穂市が刊行している『忠臣蔵』(全7巻。2と7巻が未刊)の第3巻の「資料編」です。全巻まとめて予約注文しなければならないので、図書館を利用されたらと思います。

(編集部注:この本は江戸博図書室にはありませんが、都立中央図書館には所蔵されています)

ここ両国は吉良邸に近いこともあり、討ち入られた吉良方の資料を見てこの事件がどう見えるかということで、「吉良本所屋敷検使一件——幕府検使目付の記録」(東京大学史料編纂所所蔵「丁未雑記」)を読んでいきます。

元禄15年12月14日、今でいう15日の早朝です。事件を聞いた幕府の目付が吉良邸へ来て、屋敷に残っていた者や吉良邸周辺の者から何が起き、どうしたのか、何人くらいの者が来たのかなど、を1人ひとりから聞いた調書といえるものです。

実際も火消し装束で討ち入り

吉良上野介義央の養子で、孫に当る吉良左兵衛は「自分たちも応戦し、向こうにも手負いを負わせただろう。ひょっとしたら浅野方にも死人が出ているかもしれないが、それは分かりません」といっています。

吉良邸の北側に接する屋敷の土屋主税の証言は、「昨夜八つ時ごろ(異本では七つ前)、隣家吉良左兵衛屋敷が騒がしく、火事かもしれないと思い、何かあるかもしれないので、万一の場合に備えて臨戦態勢をとった」とあります。「塀越しに声をかけ、浅野内匠頭家来、片岡源五右衛門・小野寺十内・原惣右衛門と申す者にて候」で、四十七士の主だった3人の名前が出てきています。

そこにいた5、60人は「いずれも火事装束体相見え申し候」とあります。火事かもしれないといったことと併せて、これは一つのキーワードです。

吉良邸の東側で道一つはさんだ牧野一学屋敷の家来や、北側に接する屋敷・本多孫太郎の家来の証言にも「火事」という言葉が出てきています。

太鼓を打ったという証言も

また、負傷した当主の「吉良左兵衛口上の趣」には、「昨十四日の夜八つ時過ぎ、上野介ならびに拙者罷りあり候宅へ浅野内匠頭家来と名乗り申し候にて、大勢火事装束体に相見え押し込み申し候」とあります。つまり乱入してきたときに、彼らは、自分たちが浅野内匠頭の家来であるということを名乗り、火事装束であったといっています。

また、「裏門の方は扉を破り、大勢押し込み、太鼓など打ち(中略)、長刀(なぎなた)など持参、所により押し込み申し候」とあります。

注目すべきは〈太鼓などを打ち〉とあるところです。馴染みの山鹿流陣太鼓かどうかは分かりませんが、歌舞伎やドラマの世界だけでなく、実際に太鼓を打っていたという証言をしているわけです。

討ち入りの実際を物語る調書

最初にご紹介した証言では「あるいは討ち入った方にも死者があるかもしれないが、それは分からなかった」と書いてありましたが、ここでは、「自分が負傷しながらも浅野方には死者はいなかった」とはっきり書いています。

吉良側の状況は死者16人、負傷18人、無傷107人、行方不明4人と書かれていますが、この負傷した18人がそれぞれなぜ、どうして怪我をしたかということも証言しています。

私が一番驚いたのは、浅野側が乱入するときに「火事だ」といっていることです。火消し装束を着ていたということは有名な話ですが、これは赤穂浅野家が代々火消し大名だったことに由来していると思います。火消し装束はただのカムフラージュにとどまらず、「火事だから門を開けろ」といったという証言が吉良側から出ているということは大変おもしろい点だと思います。

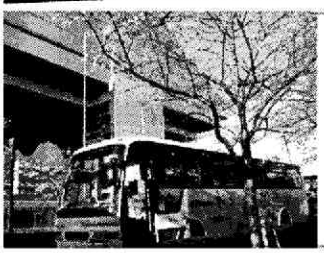
また、吉良邸内の長屋の中に100人余が息を潜めていたということについても、後世の人間は「雨戸ぐらいなら打ち破ってなんとか」と思うわけですが、実際、自分だったら何ができたかと考えてみると、やはり、何もできずに時を過ごしたのではと思います。

一気に読んでしまいましたが、この幕府の調書は討ち入りの実際を物語る資料として大変興味深いものだと思います。

◇

講師著書:『忠臣蔵事件の真相』、平凡社新書205、2003/11初版、本体740円。『古文書で読み解く忠臣蔵』、共著、柏書房、2001/12、A5判、本体2800円

【記録】編:広報部会・菅沼和男、書き起し:大野晴美、写真:佐藤幸彦



第8回江戸東京博物館友の会 特別見学会(2004/3/27)

家康の駿府城とその周辺

盛大に初めてのバスツアー

江戸開府400年記念と会員サービスを兼ねて、徳川家康ゆかりの駿府城周辺を巡るバスツアーが特別見学会として3月27日(土)開催されました。

桜開花宣言以降、天候不順が続いていましたが、当日は絶好の行楽日和に恵まれて参加者一同安堵して出発。当初の定員90名をはるかにオーバーする申し込みがあり、当日の参加者は134名、バス3台でのツアーとなりました。江戸東京博物館を朝8時過ぎに出発したバスは東名高速を走り、暖かい日差しが降り注ぐ車窓には富士山がくっきりと雪景色を表していました。

到着予定が1時間遅れましたので、「ゆい桜えび館」での生桜えびアラカルトの昼食と、浮世絵、特に東海道五十三次の版画で有名な「東海道広重美術館」の見学を併せて行いました。木曽街道六十九次、中津川という世界的にも貴重な作品の展示が今月はなく、期待していた皆さんは残念だったようでした。

次に標高308メートルの景勝地として名高い日本平へ向かいましたが、途中富士山がまるで浮いているかのような光景を目の当たりにし、一同歓声をあげました。日本平頂上から5分おきに動いているロープウェイに各号車ごとに乗り、徳川家康の廟所がある久能山東照宮の参拝と見学を行いました。

東照宮は権現造りの色鮮やかな社殿と重要文化財となっている楼門、神厩、神楽殿などが建ち並んでいて将軍の威光が目の当たりに見られました。東照宮博物館では「将軍家ゆかりのひな道具特別展」が開催中で、歴代正室の優雅な生活の様子がうかがわれました。その他、歴代将軍の武具、書画など重要文化財・美術品が多数展示されていました。

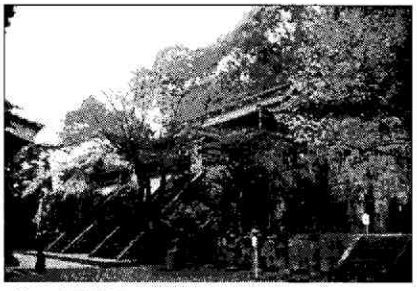
久能山東照宮山門

今回のバスツアーのメインである東照宮の参拝では、参加者の中には何回目かの方もいましたが、藤田権宮司様以下案内の神職の方の説明が大変分かりよく、皆さんあらためて感銘したようでした。

次に家康の居城である駿府城は、予定時間を2時間近く遅れたため車窓からの見学となりました。

最後の見学は家康が元服した場所として知られる静岡浅間神社(神部、浅間、大歳御祖神社の総称)でしたが、約30分と短時間になってしまい「重要文化財の建物・資料館をゆっくり見られず残念」という声が参加者の皆さんから異口同音に出されました。

バスは17時30分に浅間神社をあとにしましたが、往復とも東名高速の大渋滞に巻き込まれた影響で帰着は予定より2時間遅れの21時30分、JR両国駅前着となりました。



静岡浅間神社

この日のアンケートによれば、参加者は60～70歳代を中心に20歳代の女性から80歳代の男性まで幅広い年代に分布しており、このような友の会行事に初めて参加したという方が20名近くいました。

その方々の感想を一部ご紹介しますと、「この地方は初めてのコースで広重美術館、久能山また浅間神社も見ごたえがあり、とても勉強になりました。今後他の館内の催しにもぜひ参加させていただきますのでよろしく」(島田美智さん)、「初めて見る場所ばかりでなかなか面白かった。4,000円と低料金で盛りだくさん、幹事の皆さんに感謝。浅間神社が思った以上に立派で驚きました。もっと時間があれば…」(畠中勇さん)、「広重美術館、東照宮…もう少し時間がほしかった。宮司さんの説明には感謝」(安川美恵子さん)、「久能山東照宮の特別展示など普段見られないものもあり、参加してよかった」(難波英勝さん)など、楽しく有意義に過ごされたことが分かります。

その他の皆さんからも「とてもよい企画で楽しかった。幹事の皆さんに感謝。ぜひまたこういう企画を」といった声が多数寄せられました。また「バスツアーで会員同士の歓談ができ、友達もできた」という方も多かったようです。

ただ、「開催日をウィークデーにした方がいい」、「開催時期はこんな春休みの混んだときは避けてほしい」、「首都高速を降りたら1～2ヵ所で下車させてほしい」、「バスの最後部座席は座り心地が悪かった」などのご意見もあり、今後の企画の参考にすべきことと思いました。何はともあれ、皆さん大変お疲れさまでした。

【報告】文:事業部会・藤村武雄、写真:同・管林義隆

えど友プラザ

友の会会員のページ

●最新情報は、パソコンや携帯電話で！
ホームページ〈えど友Web〉。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報〈えど友〉のバックナンバー（Web版）もご覧になれます。携帯電話サイトも開設！　活動案内などを掲載。
アドレスは、http://www.edo-tomo.jp/

復活「江戸天下祭」と大名行列

何やら因縁めいたものが!?

黒瀬 雅博

それは、1枚のポスターからはじまった。山車、神輿、江戸風物の天下祭復活である。千代田区江戸開府400年記念事業「甦る、江戸の華」（昨年11月22日-24日開催）、早速、日比谷公園へ出かけた。

ここで、私が注目したのは、山車の生（い）き人形と郷里の大名行列との再会である。

青梅市「森下町の山車人形」は、人形名が武内宿禰（たけのうちのすくね）、人形作者が仲秀英。由来は、嘉永・安政（1850年代）期の天下祭で、徳川将軍の上覧を賜った江戸時代の代表的山車型である江戸重層型。かって山車一体だったとされている。

人形は、住吉明神のご加護のもと、三韓へ海を渡った時の神功（じんぐう）皇后の大臣であった「武内宿禰」が満珠（まんじゅう）を海に投げ入れようとする躍動感あふれる姿を形どっており、青梅市の文化財に指定されている。水引幕には、銀糸による極彩色の竜の絵が描かれている。

この里帰りした山車は、展示のみで、巡行には、参加していないため、日比谷公園に残ったたくさんの人たちに囲まれていた。

次の注目は、大名行列である。こちらは、私の郷里、山口県萩の毛利36万石の大名行列である。日比谷公園は江戸時代、長州藩毛利屋敷があった場所。そこでの大名行列とは、なにやら、因縁を感じる。

享保5年（1720年）に萩藩5代藩主吉元が金谷天満宮の社殿を修復したことを契機に始まった萩市古来の奉納行列だった、と萩市観光案内課のホームページに紹介されている。藩主吉元は萩城下の平安古町ほか4町内に命じ、必要な手廻り調達品（いわゆるお道具）、武具、衣装を下げ渡し、これらを天満宮の秋の例祭に奉納させたことが由来ともある。

この大名行列の注目は、長州一本槍の舞や草履舞で、長槍を自由に振り回す舞や、御駕籠に乗った千代田区公募のお姫様の前で少年の草履取が舞う場面である。

また、思い出すのは、萩の民謡に幕末の事件を題材にした、「男なら」という民謡がある。

江戸博クリップ

博物館の怪談

学芸員　我妻　直美

季節はずれで恐縮であるが、私は怪談が好きだ。小さい頃から怪談モノの本やマンガを読みふけっていたし、そのような話には必ず耳を傾けてきた。幽霊話や怪異現象を信じない人もいるが、自身の経験もふまえて、私は世の中には妙なモノや妙なコトがあると信じている1人だ。

ところで博物館の世界にも怪談はある。とりわけ歴史ある博物館や美術館には、おそらく一つや二つ、そのような話題があるのではないだろうか。そして、そのような話題を、仲間内でこっそり楽しんでいるふしもある。

江戸博も例外ではない。思い当たる職員が何人もいるはずだ。こんな話を耳にした、あるいはあんなモノを見てしまった・・・？！　私自身の経験では、江戸博ホールで開催されたシンポジウムに参加したとき、それらしい男性がひっそりと一緒に聞いているのに気が付いたことがある。今でもその姿をはっきりとおぼえているが、講演のさなか、うっかりうたた寝をしてしまった私の白昼夢かもしれない。

開館して10年。江戸博にもひそひそと語り合い、また職員の間にこっそり語り継がれる「博物館の怪談」が確実に育ってきている。そろそろ歴史ある博物館に仲間入りできそうだ。

◆このコラムは学芸員、館員が執筆しています。

時は、尊王攘夷論が吹き荒れる幕末、文久3年(1863年)、下関で高杉晋作など奇兵隊によるフランス軍艦への砲撃事件が起き、長州藩の武士は防備のため下関に集結した。あとに残った萩の女性たちが菊ケ浜に(女)台場を築いた。その時、士気を鼓舞するため歌ったのが民謡「男なら」である。

♪男ならお槍かついでお仲間(ちゅうげん)となって/ついて行きたや下関/お国の大事と聞くからは/女ながらも武士の妻/まさかの時にはしめだすき/神功皇后さんの雄々しき姿が/亀鑑(かがみ)じゃないかいな/オーシャリ、シャーリー(おっしゃる通りの方言)

♪男なら三千世界の烏(カラス)を死なし/主(あるじ)と朝寝がしてみたい/酔えば美人のひざ枕/さめりゃ天下を手で握り/高杉晋作さんは、男の、男よ/お偉いじゃないかいな/オーシャリ、シャーリー(おっしゃる通りの方言)

高杉晋作(1839-1867、享年29歳)といえば、久坂玄瑞(1840-1864、享年23歳)とともに、吉田松陰の松下村塾の英才と呼ばれた。その師、吉田松陰(1830-1859、享年28歳) のお墓が、山口県萩市と東急世田谷線の松陰神社にある。

思いもかけない天下祭からはじまった郷里の行事との再会であり、郷里ゆかりの人物や史跡が江戸東京にはたくさんあるものだと感じた。

草履舞(萩市観光案内課HPから掲載許可)

(写真上)青梅市森下町「武内宿禰」山車人形 (下)毛利36万石大名行列再現
写真は、いずれも筆者提供

投稿を大募集中！
～テーマは自由、お気軽に～

皆さんからの投稿を大募集しています。
テーマは江戸・東京に関連したものならご自由です。身の回りや町の話題、趣味や関心事、疑問質問。また、友の会事業のセミナー、見学会、講座、内覧会のご感想やご意見なども結構です。お気軽にご寄稿ください。

○●○

◆投稿要領――随時掲載します。
短文(表題も)を、手紙かハガキ、HPからメールで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:毎月末日。会員番号、〒住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

会報の刷新、誌面づくりにあなたのアイデアや編集企画、作品などをお寄せください。

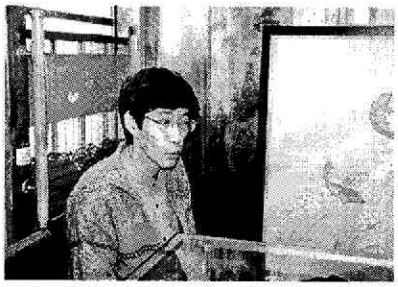
◆

- こんな会報にしたら、という誌面づくりへのアイデアや企画提案
- 取り上げたい記事や紹介したい事柄、興味ある取材先
- あなたが手がけた、絵画、イラスト、写真、手工芸品などの紹介
- あなたが作られた、詩歌、短歌、俳句、川柳などの作品提供
- あなたが研究や調べている事例の研究内容や成果の掲載

[お問い合わせ] 事務局・広報部会あて、またはHPからメールで。

江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり〈11〉

繊細な木彫りの楽しさ「松本彫刻店」



自作の欄間(左)と衝立の前で語る松本一広さん

日本の木彫りの歴史は、聖徳太子が仏教を広めるために、仏像や寺院を造らせたのが始まりだと言われています。

ミュージアムショップに並ぶ、木彫りのブローチや干支の置物。松本一広さん(墨田区石原1-13-3、電話03-3891-4907)の作品です。

一広さんは、3代目、創業120年になります。初代は浅草で始められたそうですが、2代目の一広さんのお父様の代になって、現在の場所に移って来られたそうです。それは深川の木場が近く、木材を購入するのに都合のいい場所だったからです。

子どものころはお父様の仕事の大変さを見て育ったせいか、気持ちの上での抵抗はあったようです。「でも世襲というのは不思議なもので、大学を卒業したら、この仕事を始めていました」とおっしゃいます。やはりお父様のお仕事が誇りだったのでしょう。

木彫りと言えば欄間が思い浮かびます。欄間は室町末期から、江戸初期にかけて書院造りが始まって、一般住宅にまで広まっていきました。しかし、最近では欄間の注文は少なく、マンションなどで衝立を購入される方の方が多いそうです。

用いる木の種類は杉、檜、欅などが多いようです。墨田区は葛飾北斎の出身地ということで、北斎の文鎮や絵は、ミュージアムショップに置いてあります。北斎が小布施(長野県)に長期滞在をしていたことから、小布施の名産である栗の形と大きさそのままの木彫りがあります。これはくるみの代わりに3個ほど片手に握って、擦り合わせると指の運動になります。北斎が97歳まで生きたということから長寿栗と名付けられています。

製作物は透かし彫りを主体にされています。まずは型紙を作り、木に張り付け、透かし彫りの部分に墨を塗り、糸鋸で彫ります。寄せ木造りは、細工物と違って木を埋め込んで造る象眼(ぞうがん=はめこみもの)です。木を着色しないで生かして模様を造りあげます。一木造りは、1本の木から、仏像や置物を造ります。小物はそれなりに用材に適した木を選び作られるそうです。

時代背景が変わってきて、仕事は確かに減りましたが、木で何を作ればいいかということを、一生懸命勉強しています、とおっしゃいます。また、子どものために木工教室も開いておられます。現在、東京都内で木彫りの組合へ入っている店は70店くらいだそうです。

木彫りに関心のある方で、やってみたい方、作り方の分からない方はぜひ、一広さんのお店を訪ねてみてください。親切に指導していただけます。友の会の体験教室で、ご自分の干支の作り方を習ってみたいと思いませんか?

【取材】文:広報部会・岡橋園子、写真:同 佐藤幸彦

会議・会合 日誌
2004/2/1〜3/31

◆役員会

2/12(木) 18時から開催。各部会報告などのほか、「入会案内」の新規作成、特別見学会の予算支出、来年度以降の事務環境の整備などについて協議した。出席9名。

3/11(木) 18時から開催。来年度以降予算の部会別編成案や総会の日程などを協議したほか、会員実態調査の最終報告を受けて役員会としての見解をまとめた。出席11名。

◆事業部会

2/19(木) 18時半から開催。2月に予定している創作講座の応募状況、3月の特別見学会の企画内容などを話し合った。出席13名。

3/18(木) 18時半から開催。2月事業報告、来年度企画の具体案や予算の大枠を話し合った。出席14名。

◆広報部会

2/20(金) 16時から開催。「えど友」第18号についての反省、第19号の内容と分担、来年度活動計画などを話し合った。出席8名。

3/19(金) 16時から開催。「えど友」第19号の進捗確認や来年度活動計画、予算のまとめ方などを話し合った。出席7名。

◆総務部会

2/3(火) 18時から特別見学会案内などの発送作業。出席12名。

◆3部会合同懇親会

3/19(金) 18時から江戸博2階、レストラン「モア」で開催。日ごろ別々に活動している各部会のメンバーが一堂に会して懇談した。出席22名。

事業部会だより

これからの友の会活動ご案内です。
＊参加申し込みをされた方は、やむを得ない事由のほかは、ご欠席されないようご協力ください。
＊申込方法は最終ページ参照。

友の会セミナー

第17回「江戸を食する“春”
ー天保時代のお祝いごとの食事ー」

講師　田中 実穂さん（学芸員）
井出源一郎さん（レストラン「モア」調理長）

・開催日：5月25日（火）11:30～13:30　・申込締切：5月14日（金）必着
・会場：江戸東京博物館・1階会議室
・定員：80名　（会員のみ）
・参加費：会員3,000円（当日払い）
・ご注意：特別食を用意のため、キャンセルがないようにご注意ください。

◆質実倹約が推進された天保時代は改革が断行された時代ではありますが、お祝いごとでは彩り鮮やかな料理が振舞われました。
◆当時の食文化を当館田中学芸員が講演、モアの井出調理長にレシピを説明いただきます。料理はすべて旬のもの。魚は鯛、野菜は煮しめ、豆腐田楽など6種類の料理に、こけら寿司をいただきます。

・企画責任担当：大倉和寿（事業部会）

古文書講座

今期、平成16年度から古文書講座は「入門編」、「初級編（1）」、「初級編（2）」の3講座となります。
受講方法は、「入門編」の参加は自由です。
「初級編（1）」と「初級編（2）」はほぼ同レベルですので、初級編への参加は1講座のみとさせていただきます。
「初級編（1）」または「初級編（2）」のどちらかを選び受講してください。
◆今まで継続で受講されている方も、今回は締切日までに希望講座名を明記し、応募をお願いいたします。

●入門編 第1期

・開催日時・会場　第1回　6月 2日（水）14:00～16:00　江戸博・1階会議室
　　第2回　8月11日（水）14:00～16:00　同　・1階学習室1・2
　　第3回　9月 8日（水）14:00～16:00　同　・1階会議室
・講師：野尻泰弘さん（学習院大学大学院史学専攻）
・参加費：全3回 1,000円（初回当日払い）　・申込締切：5月18日（火）必着

新講座開講!!

●初級編（1）第1期

・開催日時・会場　第1回　6月30日（水）14:00～16:00　江戸博・1階会議室
　　第2回　8月25日（水）14:00～16:00　同　・1階学習室1・2
　　第3回　9月22日（水）14:00～16:00　同　・1階会議室
・講師：小宮山敏和さん（学習院大学大学院史学専攻）
・参加費：全3回 1,000円（初回当日払い）　・申込締切：6月15日（火）必着

●初級編（2）第1期

・開催日時・会場　第1回　7月31日（土）14:00～16:00　江戸博・1階会議室
　　第2回　8月28日（土）14:00～16:00　同　・1階会議室
　　第3回　9月18日（土）14:00～16:00　同　・1階会議室
・講師：西村慎太郎さん（学習院大学大学院史学専攻）予定
・参加費：全3回 1,000円（初回当日払い）　・申込締切：7月13日（火）必着

継続受講者も、新規申込ください。

特別内覧会

企画展「発掘された日本列島2004 ー新発見考古速報」展

・開催日時:5月31日(月) 15:00(受付開始14:30)
・申込締切:5月17日(月)必着
・会場:江戸東京博物館・1階ホール/企画展示室
・同伴者:2名まで可(ハガキに氏名連記)
・参加費:1人500円(会員・同伴者とも、当日払い)

◆近年、全国で発掘された話題の考古資料を展示します。この展覧会のシリーズがはじまってから10年目を迎える今年は、これまでの集大成として、青森県三内円山遺跡など、とくに注目されている考古学の成果をご覧いただきます。
◆会期 6/1(火)〜7/7(水)
月曜休館(月曜が休日のときは翌日休館)

講座受講申込方法

お申込は通常ハガキで

●通常ハガキでお申込ください。折り返し受講票をお送りします。当日ご持参の上、受付で登録ください。事前申込みがないと受講できません。必ず申込みをしてからご参加ください。

▼申込方法:
通常ハガキに①開催日、講座名②会員番号③氏名(同伴者は連記)④〒住所⑤電話番号を明記。友の会へのご意見・ご要望もどうぞ。
・各講座ごと、会員1人1通。
▼申込先:130-0015東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局あて
▼締め切り:各講座案内を参照(必着)

会員優待のお知らせ

＊飲食施設が入れ替え、新規・新装開店! (2004/4/16現在)
〈4/17オープン〉7階=ごはんや「隅田川」、7階=Café「CARDENAS」、〈4/28リニューアルオープン〉2階=レストラン「モア」、1階=甘味処「三昧賛歌」、〈4/28オープン〉1階=「東京モダン亭」。なお、オープン日は変更の場合があります。

企画展 NHK大河ドラマ「新選組!」展

会期:4月3日(土)〜5月23日(日)
月曜休館(月曜が休日の場合は翌日休館)
ただし、5月3日(祝・月)は臨時開館です。

好評開催中

・図録 定価2,200円(税込) 会員10%割引(会員証提示)
【ご注意】会期中の会場出口物販所のみで適用。
ミュージアムショップでは割引になりません。

会 員:一般550円、65歳以上270円、大専門生440円
同行者:一般880円、65歳以上440円、大専門生700円

企画展「発掘された日本列島2004 ー新発見考古速報」展

次回予告

会期:6月1日(火)〜7月7日(水)
月曜休館(月曜が休日の場合は翌日休館)

・図録 定価 未定(税込) 会員10%割引(会員証提示)
【ご注意】会期中の会場出口物販所のみで適用。
ミュージアムショップでは割引になりません。

会 員:一般250円、65歳以上120円、大専門生200円
同行者:一般400円、65歳以上200円、大専門生320円

【訂正】第18号(3/1発行)で次のとおり、おわびして訂正します。
・7ページ 応挙展内覧会、中段「応挙没後204年」は「200余年」に訂正します。
・12ページ 上欄新選組展案内、会期「4/6(土)〜5/23(日)」は「4/3(土)〜5/23(日)」に訂正します。

活動に参加しよう 各部会員を募集!

事業部会=事業の企画・運営、広報部会=〈えど友〉の編集・PR活動、総務部会=各種案内の発送・受付
ハガキに、希望部会名、会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由、を記載して、事務局までご応募ください。

隔月(奇数月)刊。次号は7月1日発行
http://www.edo-tomo.jp/

江戸東京博物館友の会
会報〈えど友〉 第19号
発行日 2004(平成16)年5月1日
発行 江戸東京博物館友の会事務局©
130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
Tel. 03-3626-9910
編集・制作 友の会広報部会
発行・編集人/大松騏一(副会長) 編集主幹/松原良
編集/菅沼和男、岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、瀧口逸策、大野晴美、斉藤美香子 レイアウト・版下制作/巻渕彰